瓦礫の中から人生が立ち上り、世界を変える

出典：Struggle・La Lucha ,2026 年 11 月 23 日

ミシェル・シェハデ(パレスチナ系米国人著作家・活動家）著、脇浜義明訳



ガザのパレスチナの子どもたちが、瓦礫の中で描いた絵を展示している。家や学校が破壊されたにもかかわらず、子どもたちと教師たちは芸術活動を続け、未来への希望を絶やさずにいる。

10 月 7 日のジェノサイドから 3 年以上が経つが、、ガザは今もなお存続している。存続しているという言葉の意味をおろそかにしては、こんな一文を書けない。

道路や住居が破壊されたとき、都市はどのように存続するのか？　人々は子どもを埋葬した後、どのように水やパンを探そうとするのだろうか？　これほど多くの死に見舞われながら、どうして人間の精神は折れて崩れてしまわないのだろうか?

それには、一つの言葉があると思う。それは、「ガザ」である。

3 年以上にわたり、ガザでは殺害、爆撃、飢餓、包囲、追放、恐怖、そして大量虐殺が続いている。アメリカの武器と資金で武装したイスラエルという戦争機械は、家だけでなく、家庭の意味を、学校だけでなく子供時代

を、病院だけでなく、出血しているときに自分に手を差し伸ばしてくれる人間の絆や人権を抹消しようとしている。

地域全体が瓦礫となった。一つ一つの瓦礫の背後には物語がある。息子を待っている母親、おもちゃを隠している子供、一生かけて築いた家の廃墟の前に立つ父親の物語がある。

これらは単なる「戦争の惨事」ではない。これらは人の人生が打ち砕かれたものである。

これは単なる「移住」ではない。人々を故郷から追い出そうと繰り返される抑圧、冷酷な圧力、そして人々から故郷や家や記憶を奪う民族浄化である。

しかし、ガザは戦争機械が説明できないことを成し遂げた。

死者になることを拒否したのだ。

これは、恐怖、飢え、絶望が手出しできない強靭な人々の物語ではない。恐怖、飢え、絶望を嫌というほど経験しているが、それでも、子どもに水を飲ませるために、毎朝水を汲みに行く人々の物語である。

母親がテントの中を居心地よく整理して、子どもたちがまだ家庭にいるように感じられるようにしている。父親がまるで家族の将来がかかっているように大切に小麦粉を運んでいる。病院自身が血を吹き出すほど破壊されている中で、医師が働いている。教師が破れ布のテントの中で子どもたちに授業をしている。子どもたちは瓦礫の上に座って本を開いている。

墓地となるように破壊された場所で本を開く子どもの姿より英雄的なイメージは他にあるだろうか。

おそらく、現代の子どもたちはガザの子どもが耐えてきたものを体験したことはないであろう。ガザの子どもは、鳥の名前を学習する前に爆撃機の爆音を学習し、地理の勉強の前に強制移住を覚え、掛け算表を覚える前に死者の数を数えることを覚えた。それでも、ガザの子どもたちのお絵かきは、家、海、木々、太陽、学校である。それはまるで、子どもたちが「私たちの家を壊しても、私たちの想像の中の家を壊すことはできない」と言っているようである。それこそがガザの秘密であり、戦争機械が理解できないものだ。死の心の中に生命のイメージを保持するのだ。

瓦礫の下から、ガザはいまもなお知識、芸術、そして卓越した才能を生み出している。大学は破壊されたが、学生は連絡し合って、学習の場を創造する。学校は崩壊したが、テントの一部が教室になった。アトリエは亡くなったが、瓦礫の石がキャンバスになった。絵具がなくなっても、木炭が色になる。

ここに、イスラエルの破壊工作の最も深い目的が失敗したことが表れている。都市を破壊するのは、人間の意志を破壊するよりも簡単だ。

図書館は解体できるが、そこに植え付けられた知識は取り壊すことはできない。家を破壊するが、思い出に残る家路は壊せない。人を殺害しても、彼らの名前を歴史から消し去ることはできない。彼らの子どもたちが彼らの名前を語り続けるからである。

だからこそ、ガザは単なる場所よりも大きい意味があるのだ。

ガザは一つの意味になった。屈服する方が容易なときに人間の尊厳を貫く、わずかなものを飢えた人々が分かち合う寛大さ、死ぬことではなく、生きることを貫く英雄的姿勢、そして爆撃の中で子どもを背負っている女性に見られる不屈の姿勢（スムード）。最も広い人間的意味における抵抗。人間集団の抹消に対する抵抗。

ガザは世界の人民に恐れさせることを教えるモデルになるように意図されていた。ところが、ガザは世界の人民を鼓舞したのだ。ガザは世界の果てに忘れ去られた場所にするように意図されていた。ところが、ガザは世界の中心となった。

10 月 7 日にガザに火花が光り、その輝きはガザ回廊の遥か向こうに広がる。その地域は燃えた。恒久的に思われたような人民従属という前提が次第に揺らぎ始めた。パレスチナが、街路や大学、教会やモスク、公共広場、そして何百万人もの人々の良心に再び戻ったのだ。

一世代がパレスチナを新たに発見した。世界はガザの時代を生き続けているのだ。

ガザが今や世界で変化し始めているすべてを生み出したと言っているのではない。しかし、歴史そのものが乾ききり、火花を散らすのを待っている時代に、ガザがその火花の一つを提供した。集まりつつあった人民勢力の

集結を加速させ、、動かないと思われていたものを揺るがし、軍事力、金銭、考え方の支配が現実を永遠に統制できると信じていた旧世界の弱さを露呈させたのだ。

もちろん、新しい世界はまだ生まれていない。旧世界はまだ死んでいない。しかし、何かが壊れた。
ガザは旧世界の壁にひびを入れた。

歴史と政治の前で、ガザは私たちすべてに対して、決して消し去ることのできない人間的な主張をしている。

ガザの子どもたちのイメージが決して普通になってはいけない。彼らの飢えが、二度と新たな新聞の見出しとなってはならない。人類は、それに慣れてしまうほど長く大量虐殺を見つめてはならない。

ガザと共に立つことは、死を祝うものではない。それは生命への献身――子どもの殺害を受け入れないこと、都市の破壊、飢餓、そして強制的な排除を通常とすることを拒否することである。

ガザを支援することは、党派的な立場でも季節的なスローガンでもない。

パレスチナ人にとって、ガザと共に立つことは名誉なことである。アラブ人とイスラム教徒にとって、それは義務である。自由な人間一人ひとりにとって、それは人間的責任である。

「あなたの涙は統計ではない、あなたの人生は生きるに値する、あなたは一人ではないとガザの人々に告げることだ。同じ宗教、アイデンティティ、政治を共有する必要はない。子どもは子どもであり、家庭は家庭であり、ガザで生まれただけで生きる権利を失うことはないと思うだけで十分だ。

あれから 3 年以上が経った今も、ガザの傷は血を流しており、記憶、道徳的な問い、そしていまだに消えていない歴史的火花である。

彼らはガザが物語の終わりになることを望んでいた。代わりに、それは新たな章の始まりとなった。

歴史は、ある人々が虐殺、殺戮、飢餓、そして根こそぎに苦しんでも。必ず、そして自分たちが再建する家を愛し、学び、描き、夢見ると言うだろう。子どもたちが瓦礫の下から本を持って出てきたこと、故郷が壊されても人々は記憶の中に故郷の都市を抱き続けること、そして地中海にある小さな場所が、人類全体の苦しみとその希望を体現していると言うであろう。

それがガザだ。

傷ついているが、その魂の降伏を拒否するガザだ。破壊されたが、破滅が終わりを意味するわけではないことを世界に教えているガザだ。死に囲まれながらも、指の間から生命を引き出しているガザだ。

それが、ガザが書いた最も偉大な叙事詩かもしれない。

死はガザに、「お前はは終わりだ」と告げている。しかし、ガザは瓦礫の下から不死鳥のように立ち上り、子どもの顔からほこりを払い、地中海に向かって、まだ物語は終わっていない、パレスチナは終わっていないと言っている。ガザが再燃させた自由への道のりは終わっていない。

もしかすると、まだ始まったばかりなのかもしれない。

だからガザを放っておいてはいけない。今日ガザを放棄することは、パレスチナ、私たちの尊厳、名誉、そして私たちの中にある人間性を捨て去ることである。